

# おくらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

## 第 116 号

平成16年 3月23日

編集 旭川医科大学  
 教務・厚生委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課



本学から見た近郊と十勝岳連峰

(写真撮影：学生課 細木 和比古)

卒業生を送るにあたって……………八竹 直…………2	平成15年度 1年のあゆみ……………14
第26期生を送るにあたって(仮題) ……千葉 茂…………3	禁煙にみる人間の意志と遺伝子支配の葛藤……………大崎 能伸…………16
看護学科第5期生の卒業を祝う…………石川 一志…………4	ボランティア体験……………田丸 杏奈…………17
卒業にあたって……………川合かがり…………5	禁煙に関する講演会……………17
6年間を振り返って……………坂東 英明…………5	平成16年度日本学生支援機構奨学生の募集について…………18
「皆さん『白い巨塔』見てらっしゃいますか？」……………森川 文淑…………6	各種保険について……………18
医学科第26期卒業生名簿……………6	平成16年度前期分授業料免除及び延納・分納について…………19
卒業にあたって……………伊東 沙希…………7	授業料未納による除籍について……………19
「卒業にあたって」……………野尻 直美…………7	表彰制度について……………19
看護学科第5期卒業生名簿……………8	科目等履修生について……………20
平成15年度修士・博士学位記授与者名簿……………8	外国人留学生冬季交流事業……………20
退官にあたって……………北 進…………9	本学敷地内は全面禁煙となりました……………20
生理学第二講座に着任して……………柏柳 誠…………10	学位記授与式……………20
糖尿病と合併症の克服をめざして…羽田 勝計…………11	病院ロビーにてのクリスマスコンサート 4題…………21
一年を振り返って……………鷹架 健一…………12	教官の異動……………22
一年を振り返って……………高橋 利英…………12	駐車違反について……………22
一年を振り返って……………浅石 里沙…………13	窓外……………小川 勝洋…………22
一年を振り返って……………板谷 麻美…………13	



## 卒業生を送るにあたって

旭川医科大学長 八竹 直

この春めでたく医学士・看護士の学位を取得される医学科第26期生108名ならびに看護学科第5期生66名の皆さんに心からお祝い申し上げます。

医学科では6年、看護学科では4年の間、学業や課外活動に励み、知識、技術、倫理観それに人間関係の大切さなどを十分に学ばれと共に多くの思い出も作られたことでしょう。これからは今までに得られたあらゆる事柄を活用して、社会に貢献されることを期待しています。

さて、ここ数年は医療の世界のみならず医学・看護学教育の世界は変革の嵐にもまれ続けています。特に皆さんは色々な変革の場面に立ち会う事の多い運命にありました。

まず、皆さん方は旧制度による国立大学の旭川医科大学最後の卒業生ということになり、本学はこの4月から国立大学法人旭川医科大学として、新しい制度で再出発します。また医学科の皆さんは旧カリキュラムの最後の学年で、クリニカル・クラークシップ制が実施されている次の学年の臨床実習を横目で見ながら、不満も多かったのではないかと心配していました。また医学科の卒業後の臨床研修制度では義務化とスーパーローテイトを最初に経験する学年になります。この制度もぎりぎりまで細部が確定しなかったこともあり、さぞヤキモキされたと思っています。一応マッチングや処遇も概ね当初の予定の様に運んでいるようですが、これからはそれぞれの研修病院で公表されているプログラムが実行され、臨床研修の実があがることを願っています。

このように医学・看護学教育の変革が求められる背景には医療の世界の激しい変化と社会の要求があるためと考えられます。

すなわち爆発的とも言える医学の進歩によって、臓器移植、生殖技術、遺伝子診断、遺伝子治療、再生医療等の高度先進医療の話題を毎日の新聞紙上等で目にしない日がない程です。これらの高度先進医療を理解し、さらに発展させる高度な専門教育が求められる一方、社会は「ありふれた疾患をきちんと

診断・治療し、緊急事態に対処できる医師」を求めています。これらをバランスよく両立させるためにも、卒後臨床研修の2年間を有意義に過ごしてほしいものと考えています。

また高齢化社会を迎えて疾病構造が変化し、成人病あるいは生活習慣病といわれる難治の慢性疾患、中枢神経系の異常による運動障害や痴呆などが著しく増加しています。それらに対応するために、医療、看護、介護体制が大きく変化しつつあります。すなわち、より高いレベルの医療と、それに伴う高いレベルのケアが求められています。この医学の進歩を理解して、それに合った看護専門職として、常に高水準の質を備え持つことが必要になります。最近ではそのなかでもより専門性に富んだ分野の看護が考えられ、その専門家が養成されています。すなわち特定の専門看護分野の知識・技術を深めた専門看護師や創傷・オストミー・失禁（WOC）看護やがん化学療法といった様々な領域の認定看護師が活躍しています。看護学科ご卒業の皆さんも幅広い知識や技術を習得された後、さらに知識を深め、より専門性の高い看護を目指していただきたいと思います。

皆さんは今後、色々な場面で様々な変化や変革に遭遇するに違いありません。しかし旭川医科大学での生活で身に付けた「自らが問題を見つけ解決する」能力を充分発揮して、いかなる変化にも対応してくださるものと信じています。

最後に、皆さん方の先輩諸氏をも巻き込んだ医師の名義貸し問題が世の中から強く指弾される事態となりました。色々な背景があるとは言え、名義貸しは違法なことです。大学としても事の重大さを認識し、十分な反省の上にたって、今後の改善策を考えています。大変心配をおかけしたことを申し訳なく思っています。皆さんも医療者として高い倫理感を持って行動していただくことをお願いします。

卒業生の皆さんのご健康とご発展を心から祈念いたします。



## 第26期生を送るにあたって

医学科第6学年担当 千葉 茂

第26期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんの第5・6学年という医学部最後の2年間の学年担当教官として、心からお祝い申し上げます。学年担当を仰せつかった当初はその仕事内容をよく理解していませんでしたが、皆さんからさまざまな相談を受けているうちに、私も学年担当教官として少しは役に立つ存在にならなければという気持ちになってきました。しかし、2年という歳月は瞬く間に過ぎてしまい、十分なことが出来たかどうか忸怩たる思いがあります。

皆さんは、時代の変化を直接受けることになった学年といえるでしょう。本学附属病院が大幅な増改築の時期を迎え、工事や病床数減少のために落ち着いた状況で臨床実習に臨んだこと、本学教育カリキュラムの改革の影響で1年下の後輩と一緒に臨床実習を行うことになったこと、平成16年4月から始まる卒後臨床研修制度に対応しなければならなかったことなど、いろいろ苦労が多かったのではないかと思います。しかし、この激動の時期に直面したことを貴重な経験として捉え、これからの人生に生かしてほしいと思います。また、皆さんの教育に熱心にかかわってくださった本学教職員や関連病院の皆様への感謝を忘れないで下さい。

皆さんは、第5学年秋に行われる客観的臨床能力試験(OSCE)の準備として、その年の夏から講義が終了した夕方の時間を利用して、ビデオで臨床実技を勉強したのを覚えていますか。また、その後、多くの教官による実技指導を熱心に受けました。その努力の甲斐あって、皆さんはOSCEにおいて優れた成績を修めたわけです。OSCEの模擬患者の皆様からも、高い評価を受けました。これは、実技指導に携わった教官にとっても、また、学年担当教官にとってもうれしかったことであり、また、皆さんの能

力(磨けば光る能力)が非常に高いことを示すエピソードであります。「医師国家試験」でもその能力を十二分に発揮なさったことと思います。良い結果を心待ちにしております。

さて、私は、旭川医科大学医学部同窓会長の任を仰せつかっておりますので、この場をお借りして、皆さんのご卒業とこれに伴う同窓会入会を心から喜び申し上げます。本学医学部同窓会は、1979年に第1期生(私も1期です)が卒業したときに発足しました。現在の会員数は2605名(第1~25期生)であります。同窓会員は、道内はもちろん道外や海外でも活躍しております。26期の皆さんの卒業後に進む道はそれぞれ異なるかもしれませんが、いずれの分野においても本学卒業生が着実に立派な仕事を進めていることに気づくはずです。そして、母校の卒業生同士の絆の大切さを実感すると思います。

本学卒業後は、「社会人」としての、また、「医師」としての新たな生活が待っています。社会は、皆さんに厳しい視線を向けると同時に、大きな期待を寄せています。自分の心の中に高い目標を掲げ、未来に向けて力強い一歩を踏み出してほしいと心から願っています。

最後に、皆さんの卒業のはなむけとして、この言葉を送りたいと思います。私のかつての留学先であるカナダのプリティッシュ・コロンビア大学に掲げられていたラテン語で、その意味するところはとても深いと思われま

Tuum est

(It's up to you. それは、あなた次第である。)

(精神医学講座 教授)



## 看護学科第5期生の卒業を祝う

看護学科第4学年担当 石川 一志

(風のなかのす～ばる 砂のなかのぎ～んが……♪)

ここに一枚の模造紙がある。7人の学生それぞれの特徴をよくとらえた漫画が画かれている。これは、第5期生が入学した平成12年4月、白金温泉で新入生宿泊研修が行われ、グループ毎に自己紹介をすることになった際にある新入生が画いたものである。さすがに歳月を経てやや黄ばんではいるが、ある者はバレーボールのレシーブをし、ある者は自転車に乗り、ある者はセロを弾き、またある者は薬缶を持ち、というように様々な姿が描かれている。他のグループの自己紹介も、二人羽織や座布団ゲームなどの形式で趣向を凝らし、非常に個性的であったことを記憶している。全員が大層潑刺とし、元気に溢れていた。

あれから早や4年。3年次編入生10名を加えた66名が学業を修め、卒業を迎えることとなった。振り返ってみると、入学時の元気の良さ、活発さは終始変わらず、それがこのクラスの特徴であったように思う。クラブ活動や学内の諸行事に積極的に参加し、またボランティアやアルバイトに精を出し、恋愛をし、友人と旅行したことなど、時々来室する学生達の話にのぼった。2年生の時の医大祭では、有志が「バリア・フリーからユニバーサルデザインへ」と題する展示で医学展大賞に輝いた。単位互換制度を利用して北海道教育大学で単位を取得したのもこのクラスの学生が初めてであった。最後までクラブ活動を続けた学生も多く、主将をつとめた学生は、実習の際にまとめ役としてその経験を生かし、リーダーシップを発揮したと聞いている。

ここ数年間で大学のまわりの様子も大きく変わった。それまで田や畑であった土地に新しい住宅やアパートが次々に建築された。ラーメン屋、すし屋、ハンバーグ店など、多くの店がオープンした。これらの店でアルバイトをしている学生に度々出会うようになった。以前、大学の近くで20坪ほどの畑を借りて休日ごとに野菜作りをしていたことがある。その土地の上にも今では焼肉屋が建っている。余談に

なるが、当時90歳に近かった地主さんが作る野菜はどれも豊かでみごとなものであった。畑を借りていた数年間は、地主さんが種を播けば種を播き、土寄せをすれば土寄せをし、収穫の時期もみ倣うというように、作り方から作業の時期まで地主さんを手本としていた。しかし、どの作物も出来栄では到底足元にも及ばなかった。毎年ほとんど同じような作業の繰り返しをしているように見えたが、連作障害が起きないように作付けの区画を変え、地力が落ちれば堆肥を鋤き込み、除草や保温に手間をかけるなど、常に工夫を怠らず、労を惜しまなかったことをやがて知った。

幸いなことに、これを書いている時点でほとんどの卒業生の就職が内定している。いよいよ4月からは各地の病院や保健所などで仕事に就くことになる。言うまでもなく重い責任を伴う仕事である。市内のある病院の看護師から聞いたのだが、初めのうちは緊張感を持って仕事に臨み、毎日が新鮮だった。しかし、慣れてくるにしたがって単調な作業の繰り返しであると感じるようになり、同時に、技術に妙な過信を持つようになった。そのうち再度勉強する機会があり、それまで自分が見過ごしていたもの、認識が不十分だったものが見えてきてからこの仕事の本当の面白さ、奥深さが分ってきたという。患者は、しっかりした技術を持っていて、手を抜かない看護師には安心感を抱く。昔、といっても卒業生の皆さんが生まれる前のことであるが、♪この世で一番大事なものはクルマでもない 名誉でもない ましてお金ではない。粒々の粒々の汗をながせ♪、という歌が流行ったことがある。今回卒業する学生は、元気なだけあって労を惜しまず、汗をかく事ができる者ばかりである。汗をかけるうちは幸せである。日々新鮮な気持ちで研鑽を積み、持ち前の活力で仕事に邁進されるように願っている。卒業おめでとう。充実した幸福な人生を。

(看護学講座 助教授)

## 卒業にあたって

医学科第26期卒業生 川合 かがり



国試を目前にひかえ、毎日の大半の時間、机に向っています。そんな中、ふと顔をあげると一枚の写真に目をとめ、よく思い出すことがあります。

半年前、毎日テニスコートの中を走りまわっていた健康的な日があつた。

私が所属していた軟庭部は比較的体育会系の部活で、夏になると毎日部活があります。合宿などで長い時間を共にすごしていると自然と深いつきあひになっていき、たくさんの思い出があります。みんなでがんばった練習、繰り返される朝までの飲み会、試合で泣いたり笑ったりしたこと、この先経験することのない、学生時代だけの貴重な思い出です。

50人もの部活の人の中では、もちろんトラブルがあつたり、大会前に熱くなりすぎて、ぶつかりあつ

たことなんかもありましたが、いろいろ考え方の違う人の中でやっていく難しさや、人間関係を学んだように思います。

そんな中で得た一番大きなものは、やはり、人とのつながりだと思います。冒頭にある「写真」というのは、私とそのペアの試合中の写真で、その後ろで応援してくれている後輩がうつっているものです。隣にいてくれた仲間や、応援してくれていた後輩、又、お世話になった先輩、本当に大勢の人に支えられていたのだと、その時はあまり意識していなかったかもしれませんが、今、改めて思います。

部活だけではなく、この6年間は、つらい時やテスト前の苦しい時、いつもはげましあえる友人や、応援してくれる家族がいたからこそ、がんばれたのだと思います。今はそんな皆様に心からお礼を言いたいです。

これから、医師として働いていく中で多くの出会いがあると思いますが、そこで出会った人とのつながりを大切にしていきたいと思っています。

## 6年間を振り返って

医学科第26期卒業生 坂東 英明



無事に卒業が決まり、国家試験まであとおよそ1ヶ月となった今、大学生活6年を振り返ると「あつという間だったけど、本当に充実していた。」といったところでしょうか。

6年前、期待と緊張を胸に旭川に引っ越してきた日を今も鮮明に覚えています。高校を卒業したばかりで顔も童顔な私にとって、同じ学年の仲間がひどく大人に感じました。大学に入学したら、バイトも部活もやって、勉強もがんばろうと意気込んでいましたが、最初の頃は皆の後をついていくのがやっとという感じでした。部活とバイトの両立がなかなかうまくできず、両方から怒られひどく落ち込んだこともありましたが、友達に愚痴を聞いてもらったり、励まされながら何とか挫折せずに最初の一年を終えることができました。その後も

英会話を始めたり、一人で海外旅行をしたりと次々と新しいことに挑戦してみました。高校までは本などはほとんど読まなかったのですが、旭川の夜があまりにも静かだったこともあり、自分でも驚くくらい本を読むようにもなりました。もちろん思うようにいかなかったこともたくさんありましたが、毎年自分が精神的に成長しているように感じました。高校時代のひ弱な私を知っている友人達は、以外にも逞しくなっている今の私を見て驚くのではないのでしょうか。

4月からはいよいよ学生という身分を終えて社会人の仲間入りをするわけですが、医師という責任のある職業につくにあたって、旭川医科大学の6年で得た知識と経験を生かし少しでも社会に貢献できたらと思います。そしてその中でまた日々自分が成長しているのを感じられたらと思います。

最後になりましたが、諸先生方、ともに学んだ同学年の仲間、部活の先輩・後輩、陰で支えてくれた両親、お世話になった皆さんに心から感謝の気持ちを述べたいと思います。本当に6年間ありがとうございました。

## 「皆さん『白い巨塔』見てらっしゃいますか？」

医学科第26期卒業生 森川文淑



今、TVドラマ『白い巨塔』が大変な人気ようです。私も普段ドラマなどあまり見ないのですが、この作品だけは例外で毎週欠かさず「おいおい、こんな格好のいい医者ばかりいないよ」や「それにしても黒木瞳は色っぽいな」など様々な突っ込みを入れつつ楽しんでおります。ある雑誌で有識者がこの作品がこれほどまでの支持を得た理由として以下の二点をあげておりました。

- ① 主役級の豪華な俳優陣を揃えたこと
- ② 実際の医師の監修により医療現場のリアルな描写が可能となったこと。

②についてはおそらく手術場での動きや病棟の雰囲気など表面上のことを言っているのですが、ドラマを視聴している一般の方は「なるほど、リアルということはこの作品全般のことを指しており、今も日本の大学病院はこのように旧態然とした伏魔殿

のような場所なのだろうな」というイメージを抱く方も少なからずおられるように思います。実際私の周りでもそのような例は散見され、祖母などは心配になって電話をかけてくる程でした。（私としては祖母が『おれおれ』詐欺にひっかからないかということの方が余程心配なのですが。）

このようにマスメディアの影響は大変大きく、そして悲しいかな最近では『名義貸し』『医療ミス』など医の負の側面ばかりが取りざたされた結果、医師に対する風当たりは厳しいものになりつつあるのが現状です。昨年1年間臨床実習で何人かの患者様を担当させて頂きました。知識も技術もそして医師の資格もない私ができることといたら、患者様の話を聴いてそれを指導医に伝えること位で、正直自分の存在意義が見出せず歯痒い思いをすることもしばしばでした。しかしそんな日々の中私を支えたものは月並みかもしれませんが、やはり患者様の笑顔や喜びの声でした。世間の医師に対する視線はますます厳しいものになっていくでしょうが、これから私に出来るのは現場でただ一步一步前に進んでいくことだけです。なにせ『事件は会議室ではなく現場で起きている』のですから。おっとこれは違うドラマでしたね。大変失礼致しました。

## 卒業にあたって

看護学科第5期卒業生 伊東沙希



目前に控えた国家試験に気をとられているうちに、少しずつ卒業が近づいているという事を、この原稿を書きながら、改めて気付かされています。確実に4年という月日が流れたのかと思うと、その時の流れの早さに只々驚いてしまうばかりです。

皆それぞれ異なる個性を持つように、卒業生はみな、それぞれ個性にあふれた、かけがえのない大学生活を送ったのではないのでしょうか。

さて、卒業を迎えるにあたり、やり残した事はあるだろうか…と考えた時、いろいろと考えてはみたのですが、私の場合は特に見当たりませんでした。もっと旅行をしたかったなあなど上を見たらきりはありませんが、やりたいと思っていた事はなんだか全てやってしまった様な気がします。とても晴れ晴れとした気持ちです。

4年をかけて看護を学んできましたが、人とどの様に向き合っていくかという根本的なところを、学び直す事ができたように思います。これからは、机上ではなく、臨床の場で、看護を実践しながら、多くの事を学んでいきたいと考えています。

国家試験が終わるまで、なかなか自由な時間はありませんが、国家試験が終わってからは、卒業まで残された大学生活を最後まで楽しみたいと思っています。そして今以上にたくさんの思い出を作って、笑顔で卒業するつもりです。

新しい生活は、期待と不安で胸がいっぱいですが、この大学生活で得たものを忘れずに頑張っていけたらいいと思っています。

四年間を通し、多くの方々と出会えた事は大学生活における、大きな財産となりました。その出会いに心から感謝しています。また、様々な立場から、あたたかく見守って下さった方々にも心からお礼を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

## 「卒業にあたって」

看護学科第5期卒業生 野尻直美



四年と半年前、私は看護学校を辞めました。たまたま踏み込んだ看護の道を、本格的に歩むため大学進学を決意したからです。「再受験しても受かる保証はない。」という揶揄の中、辞めるという決断は、たった18年の人生ではありましたが、最も

勇気のいることだったと思います。応援してくれたのは、友人、そして、母でした。「直美ならやれるよ。」という励ましの言葉がなければ、この学校にはいらなかったかもしれません。「離れても同じ看護の道だから、いつか会える。」と送りだしてくれた友人に感謝しています。

四月、友人たちとも離れ旭川での大学生活がスタート。親元を離れ自由を謳歌していたはずが、入学したての熱気も冷め始めた五月。「勉強しないの?」と急きたてる声も聞こえず、自分の声だけが

響く毎日に、寂しさを感じていました。そんな時母から電話。「もしもし?」いつもとかわらない声を聞いて不覚にも涙。「一丁前にホームシック?」とからかう母に腹を立て、慌てて電話を切りました。五分後、再び母から電話。「食べてる?友達できた?」子供扱いすると内心不快に思う私に、「さっきの声、ちょっと変だったから心配になって。」大学生になった、親元離れた、死なない程度に自炊もしてるし、ちょっと大人になったと思っていました。ですが、少しの変化でも見抜いてしまう、やっぱり母にはかなわない。いつも見守ってくれていることを実感しました。

人間は一人では生きてはいけない、いつもだれかに見守られている、とはよくいいますが本当だと実感しています。寂しい時共に騒いでくれた友達、感傷等感じさせないほど忙しく勉強に打ち込ませてくれた先生方、三食のうち一食はまともなものを食べさせてくれた食堂のおばさん、どの人も私の四年間には欠かせない方達です。大切な人と離れることは寂しいのですが、いつか、偶然再会できることを信じてこの別れを楽しんでみようと思っています。

### 平成15年度 博士学位記授与者名簿

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
浅井 眞人	課程博士	平成15年6月30日
羽廣 敦也	課程博士	平成15年6月30日
及川 賢輔	課程博士	平成15年6月30日
有倉 潤	課程博士	平成15年6月30日
飯田 康人	論文博士	平成15年6月30日
三浦 貴徳	論文博士	平成15年6月30日
前本 篤男	論文博士	平成15年6月30日
川合 重久	論文博士	平成15年6月30日
大坪 誠治	論文博士	平成15年6月30日
鈴木 昭広	論文博士	平成15年6月30日
大谷 克城	論文博士	平成15年12月25日
市川 英俊	課程博士	平成16年3月25日
上村 淳一	課程博士	平成16年3月25日
バルツニヤム, エルデネチグ	課程博士	平成16年3月25日
坂本 淳	課程博士	平成16年3月25日
野地 仁	課程博士	平成16年3月25日
辻 宗啓	課程博士	平成16年3月25日
槌谷 宏平	課程博士	平成16年3月25日
片山 昭公	課程博士	平成16年3月25日
石田 芳也	課程博士	平成16年3月25日
野澤 はやぶさ	課程博士	平成16年3月25日

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
山田 武宏	課程博士	平成16年3月25日
本望 聡	課程博士	平成16年3月25日
栗山 周子	課程博士	平成16年3月25日
高山 浩二	課程博士	平成16年3月25日
齋藤 哲也	論文博士	平成16年3月25日
鈴木 康秋	論文博士	平成16年3月25日
海老澤 良昭	論文博士	平成16年3月25日
園部 勇	論文博士	平成16年3月25日
高原 幹	論文博士	平成16年3月25日

### 平成15年度 修士学位記授与者名簿

氏名	学位記授与年月日
谷口 友理	平成15年9月30日
山内 まゆみ	平成15年9月30日
澤田 貴美子	平成16年3月25日
橋本 笑美子	平成16年3月25日
高室 典子	平成16年3月25日
寺島 泰子	平成16年3月25日
羽原 美奈子	平成16年3月25日
舟根 妃都美	平成16年3月25日
高 玉琴	平成16年3月25日





## 退官にあたって

歯科口腔外科学講座 教授 北 進 一

昭和52年11月、附属病院が開院して丁度1年後に歯科口腔外科の担当を命じられて着任致しました。

まさに「光陰矢のごとし」、あれから26年間と4か月もの期間が経過したとはまだ信じられなく、何度も指折り数えて確認している次第です。

着任と同時に、うれしいことではあります。診療内容はかなり「きつい」ものとなりました。これまでは道央、道北、道東地区に口腔外科を担当する医療機関がまったく無く、すべて札幌の北大、札幌医大に患者を送るしかなかったのが、本学の附属病院に歯科口腔外科が設置されたからです。これらの地区の紹介医と特に患者さんにとっては大きな貢献ができることになったと感じたものです。

歯科の診療機関からは口腔の腫瘍を疑うもの、炎症性・嚢胞性疾患、顎骨の変形症、あるいは一般歯科で可能な治療ではあるが、内科的に重大な疾患を持つ患者などの紹介が多く、医科の診療機関からは、口唇・顎・口蓋裂、顎骨骨折を伴う外傷性疾患、顎骨骨髓炎や顔面・頸部の蜂窩織炎、良性および悪性腫瘍、三叉神経痛を主とする顔面の神経性疾患などが主な紹介患者でありました。

限られたベット数が頭痛の種で、悪性腫瘍のような大きな手術は、術後の安定を確認すると直ちに市内の関連病院に移して、次の手術患者を入院させる、救急病院に搬送された顔面外傷の手術依頼は、その病院に向いて手術を行なう、という方式でやりくりしておりました。

その一方では、医局員の手術能力の養成のために、止むを得ないことですが多大な時間を取らねばなりません。悪性腫瘍の頸部郭清術は、2～3時間の手術時間ですが、指導手術となると倍の時間を要します。このような経過を経て、複数の認定医および専

門医（指導医）を養成すると、やっと自分の時間が得られることとなります。

8年間が経過して、教授会のご理解とご協力のお陰で、昭和60年4月から医学部の講座に昇格となりました。新しく講座研究棟も完成し、講座研究費も配当され、歯科口腔外科学が必修科目となり、新たな感動と充実感に満ちた生活を迎えることになりました。しかし、教官定数は、教授1、助教授1、講師2、助手1だけであり、今後とも助手の定数増は殆んど期待できない状況にあると思います。

医学部の学生に対する教育は、口腔科学（Stomatology）の基本的な知識を持ってもらうことをその目的と致しました。すなわち、口腔の生理的機能、口腔特有の疾患、全身と口腔症状の関わりが理解できる医師の育成を目指すことにしたわけです。

その結果、育成にどれほどの貢献ができたのか、はなはだ心もとない限りですが、時には教育効果を感じてとても嬉しくなることがあります。最近の例では、心内膜炎の患者の担当医（本学出身）が、その背景に歯性病巣感染症を疑って、口腔に存在する慢性病巣の検査と処置を依頼して受診させたことです。検査の結果、多数のう蝕と顎骨内の根尖病巣、歯周炎があり、これらの慢性病巣をすべて除去した結果、心内膜炎の治療結果はきわめて良好であった、との報告がありました。

今後とも本学に歯科口腔外科学の教育が存続致しますことを切に願う次第です。

また、この4月からはいよいよ国立大学法人化への移行となり、大きな変革への節目の年となります。本学の今後益々のご発展を心より祈念致しまして、退官に際してのご挨拶に換えさせていただきます。



## 生理学第二講座に着任して

生理学第二講座教授 柏 柳 誠

私は、大学生の時から一貫して薬学部在籍しながら、嗅覚および味覚に関する分野を生理学的に研究してきました。「薬学部において生理学的な研究をしているとは」と奇異に感じる方が多いと思いますが、その印象は間違っておらず、日本薬学会の中では片手でも数えることができるくらいの少数派です。私が薬学部にながら生理学的な研究を始めることになったのは、入学当時の北海道大学の制度に大きく起因するものと思われまます。30年ほど前の北海道大学の場合は、農・工・理・薬・獣医に進学を希望する学生は、理類というきわめて大きくりのグループで募集されていました。理類に入学した私が薬学部を選んだのは、基礎的な生物学と化学を学べる上、就職に困らない薬剤師という資格を取れるというそれほど威張ることが出来ない理由でした。私のような学生を数多く受け入れる薬学部では、薬にあまり縛られない研究が数多く展開されていました。その中で、偶然、嗅覚と味覚を専門とする生理学に出会い、現在も研究を続けております。

ヒトよりも下等な動物では、嗅覚・味覚の喪失は捕食者により殺害される、餌を見つけることができずに餓死してしまう、毒物を摂取して死に至るといように、生死に深く関わる重要な感覚です。一方、ヒトにおいては、心臓の機能を失うことは直ちに死に直結しますが、嗅覚・味覚の機能を失っても直ちに死を迎えるわけではありません。しかしながら、古代エジプトの壁画に香油を体に塗っている場面が描かれているように、香りはヒトの生活を彩る重要な要素として長く存在し続けてきました。また、各国の料理が長い歴史をもって絶え間なく進化し続けているということは、食というものは単に栄養を摂取するためだけではない、豊かな人間生活を送るために欠くことのできない要素となっていることを雄弁に物語っています。

1980年代の初頭までは、味細胞は電気的にはサイ

レントな細胞であると考えられていました。私は微小ガラス電極を苦勞して味細胞に挿入して、味細胞で伝達物質の放出に必要な活動電位が生ずることを世界に先駆けて示しました。その後、1990年にノーベル賞を受賞したNeherとSakmannが開発したパッチクランプ法の感覚生理学の分野への応用により、味細胞や嗅細胞のように細胞が小さいものでも電気生理学的な解析が容易になりました。この手法を用いることにより、1990年の後半には、哺乳動物のフェロモン受容細胞から直接フェロモン応答を記録することに世界で初めて成功して、受容細胞レベルでのフェロモン受容機構を解明することができました。これらの成果は、*J. Physiol.* や *Am. J. Physiol.* といった生理学の専門誌に発表しましたが、前者の結果は私が発表した年と同年、後者は翌年にそれぞれ *Science* と *Nature* にアメリカの学者により確認されるような形で発表されました。

旭川は、私が留学していたドイツのフランス国境の近くの大学町Homburgによく似ています。Homburgでも、街の主たる産業の一つは医学部と付属病院でした。第二生理学教室に属していたLindemann教授の研究室は、スタッフは数人と決して数は多くは有りませんでした。質の高い論文を毎年発表していました。このため、Lindemann教授は味と匂いの分野では比較的新参者でありながらも *Nature* で総説を書く機会を与えられるように評価されていました。奇しくも、留学先と同じ第二生理学講座を担当させていただく機会を与えていただきましたことは、何らかの因縁を感じます。その因縁を活かすよう、大きな研究室ではなくとも着実な歩を進めていき、今まで著者として掲載されることがない *Nature* や *Science* に発表できるような成果を上げ、旭川医科大学に少しでも貢献したいものと念じております。



# 糖尿病と合併症の克服をめざして

## (教授就任のご挨拶)

内科学第二講座 教授 羽田 勝 計

2003年12月1日より、牧野勲名誉教授の後任として、内科学第二講座を担当させて頂いております。私は、和歌山県で生まれ、北アルプスの麓、長野県大町市で育ち、三重県の高校を経て、大阪大学医学部を1976年に卒業しました。卒後研修の後、本学より2年遅れて開学した滋賀医科大学にまいりました。1980年から1982年の2年半の米国留学期間を除き、20年以上を滋賀医科大学で過ごした後、本学に赴任いたしました。

一般研修終了後は「糖尿病」の診療・研究を志し、米国シカゴ大学留学中は異常インスリンによる糖尿病症例のインスリン遺伝子を解析する機会を得ました。この症例は、遺伝子異常による糖尿病同定の端緒となった症例で、その後、インスリン受容体異常症、ミトコンドリア遺伝子異常による糖尿病、ある種の転写因子異常による糖尿病などが続々と同定されています。

さて現在、糖尿病の増加が問題になっています。2000年の糖尿病症例数は全世界で1億5100万人ですが、10年後の2010年には2億2100万人と46%増加するとされており。最も増加率の多い地域が我が国を含むアジア地域で、10年間に57%の増加が見込まれています。我が国の2002年の調査では、糖尿病が強く疑われる人が740万人、糖尿病の可能性を否定できない人を含めると1,620万人に達しています。このような糖尿病の増加は、糖尿病疾患感受性遺伝子を有している人に、脂肪摂取の増加による肥満・インスリン抵抗性と自動車の普及による運動不足が加わったことによる、と考えられています。これらの生活習慣の改善が重要なのですが、それが困難であることも事実です。そこで、糖尿病疾患感受性遺伝子の同定とテーラーメイド医療、インスリン産生細胞の構築を主とする再生医療が模索されており、私共もこれらの全国規模の研究に加わってまいりました。

私自身は米国から帰国後、糖尿病性血管合併症特

に腎症の診療・研究に従事し、現在に至っております。糖尿病はインスリン分泌障害・作用不足により血糖値が上昇する代謝疾患ですが、最も重要な点は、全身の血管を障害する血管病である点だと思えます。すなわち、糖尿病網膜症は成人失明原因の第一位であり、腎症は透析療法導入原因の第一位です。さらに、神経障害と末梢血管障害は下肢切断原因の第一位であり、脳梗塞・心筋梗塞ともに非糖尿病患者の数倍の頻度で生じます。このような血管合併症の克服こそが糖尿病の真の治療目標と考え、研究活動を行ってきました。これまでに、いくつかの治療標的分子の同定とその制御法の開発を行い、少なくとも動物レベルでは腎症を含む血管合併症の発症・進展を抑制することが可能となってきています。なかでも、プロテインキナーゼC (PKC) 活性化が、現時点で最も注目されている標的分子の一つです。すでに経口投与可能なPKC阻害薬が開発され、種々の血管合併症を対象に、臨床試験が開始されています。また、血管合併症特に腎症にも遺伝因子が関与していることが、これまでの疫学調査から明らかにされています。現在、種々の解析法を用い、ゲノムワイドな腎症疾患感受性遺伝子の検索を多施設共同研究で行っております。このような遺伝子が同定されると、その遺伝子を有している症例に積極的な介入を行うことが可能となると共に、遺伝子産物を標的とした新たな創薬も可能になると考えられます。

この様に、糖尿病および血管合併症の克服をめざして新しい技術を用いた画期的な治療法の開発が進められており、私も今後ともその一翼を担うべく全力を尽くし、旭川医科大学から新しい情報を世界に向けて発信したいと考えております。一方で、このような治療法が臨床応用されるまでは、地域に密着した地道な診療活動の継続が必要であります。この両者の達成には、学内各部署のご協力が必須であり、是非ご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 一年を振り返って

医学科第1学年 鷹 架 健 一



昨年4月、僕はこの旭川医科大学に入学した。なんと、あれからもう1年が経とうとしている。去年は入学をかけて奮闘し、今は進級をかけて奮闘している。

期待を胸に新しい生活はよかった。学校では友達はいいい人に見えたが、まだ緊張していて本性が出ていない人が多かった。初めての一人暮らしも制約なしの自由な生活が最高だったが、朝・晩2回も自分の作るまじい飯を食べなければならないのは最低だということにその時はまだ気づいていなかった。この試験期間、体に悪い食事を続けるのは本当によくないとしみじみ感じる。一人前の医師になるには時間がかかるが、やっと一人前や〜!…でも、もう寿命や〜!ではしゃれにならない。

どうやら、部活について語るべき時が来たようだ。僕はソフトテニス部に所属、練習はシーズン中週6

日、日が暮れてボールが見えなくなるまで続ける。さすが別名、旭川体育大学。だが、体育系の熱さは練習だけではない。他大学との飲み会は試合前だろうとなんだろうと関係なく、むしろ試合前に行われるべき恒例行事とされているのではなかろうか。この一次予選を突破した者だけが本試合に参加できる。翌朝、一次予選で半死の重症を負いなかなか来ない先輩。しかしゲロを吐きながらさっそうと現れた彼は勝ち進み、ドラマチックな逆転勝利(というのか!?)とありあえずこんな感じですね。

部活もいいが本業についても語るべき時が来たようだ。講義の形式は高校の頃と異なり新鮮な実習が多い。実習には医療施設に赴きいろいろと貴重な体験ができる早期体験実習・身近な問題について議論しあうチュートリアル・チャイニーズハムスターの解剖で有名な生物実習・手に汗握る物理実習・足に汗握る統計実習・進級最大の砦、冷や汗握る組織実習などがある。どれも汗臭い、いや、熱い実習だった。

さて、これから後少なくとも5年間この大学で勉強していくわけですが、これからもっともっといろいろなことに挑戦して、積極的に旭川ら一めんを食べて頑張っていきたいと思います。

## 一年を振り返って

医学科第1学年 高 橋 利 英



私がこの大学に入学してから1年が経つ。入学当時、千葉県出身の私にとって旭川の厳しい寒さは耐えがたいものであったが今となってはその寒さにも慣れ、むしろ北海道の雄大な自然を満喫する余裕さえできた。旭川は北海道の

ほぼ中央に位置するため道内の各地に行きやすい。私も長期休暇や試験後は小樽の美しい町並みや函館のすばらしい夜景、そして富良野の広大なラベンダー畑などを見て心を和ませた。さらに旭川冬祭りや札幌雪祭りは雪が初めてだった私にとって非常に感動的だった。このような大自然の中で大学生活を送れたことは私の生涯の思い出となるだろう。

医学部とは言っても1年生で勉強したことは一般教養が大半であった。それでも他の総合大学とは違って組織学など専門的なことも勉強した。そのよう

な講義の時は自分が医学部に在籍していることを改めて実感することができ、その実感が勉強に取り組む姿勢を支えてくれた。また、前期には新入生研修や早期体験実習など多くの良い刺激があり大学生活が単調でつまらないものとなることは決してなかった。

さて、私は臨床医になりたいくてこの大学に入学した。具体的にどのような臨床医になってどのようなことがしたいのかはまだ分からない。大学生活はその答えを見つけ出す場でもある。幸い私はこの1年間で多くのすばらしい友人や先輩方と巡り会うことができた。この春に入学してくる後輩たちとの関わり合いも私の大学生活をさらに充実したものにしてくれるだろう。このような人たちとの様々な体験や勉強で学び得るものが私の将来を決める重要な要素にきつとなる。非常に短い1年間ではあったが、この1年間は今後の私の大学生活、ひいては今後の私の人生の確かな基盤となるだろう。今の気持ちを初心としていつまでも胸に抱きしめながらあらゆる困難に立ち向かっていく、そのような今後を歩みたい。

## 一年を振り返って

看護学科第1学年 浅石里沙



この1年間は、本当にあっという間でした。入学当時、親元をはなれてのはじめての生活がはじまり、不安でいっぱいだったことを覚えています。また、それ以上に、大学生活、自分の選んだ看護の道の勉強をすることができるのだと、わくわくし、期待もとても大きかったです。そんな昨年の春から、もう1年も経ちます。この医大ですごした1年間、たくさんのことを学び、毎日を楽しくすごしてきました。

4月は、入学式、新歓合宿と初めから、大学のすごさに驚かされました。授業がはじまり、部活にも入りました。前期は、行事もあり、暇な時間も多かったので、自分のペースをつかむのに、とてもいい時期だったと思います。前期のテストは、教科も多く、大変でしたが、何とかのりこえることができ、後期に進むことができました。後期は、実習とレポー

トに追われ、気がつくや年末というような、忙しい時期でした。また、週に2回基礎看護技術の授業もあり、実際に看護という仕事に密着した授業で、毎回緊張し、学ぶことが、とても多かったと思います。冬季休業が終わると基礎看護実習がありました。実際に病院へ行き、患者さんと接し、学内の授業だけでは、学べないことをたくさん学ぶことができました。この初めての基礎看護実習は、これから看護の勉強をしていく上でも、看護師になってからも、忘れられない、大変心に残る実習になったと思います。

この1年間、友達の大切さも強く感じました。辛いことや、悲しいこともいろいろありました。看護の道に進むのに不安を感じたこともあります。しかし、そのたび友達が一緒にがんばろうとなぐさめてくれたり、話をきいてくれました。1人暮らして、淋しい思いをすることもありましたが、そんなときも友達がなぐさめてくれました。友達のおかげで、辛いことも乗り越えることができ、1年間頑張ることができました。

この1年間本当にたくさんのことを学ぶことができました。大学生活残り3年、悔いの残らないように、精いっぱい頑張っていこうと思います。

## 一年を振り返って

看護学科1年 板谷麻美



去年の春、私たちがこの大学に入学してから早くも一年が経とうとしています。ものすごく早く過ぎ去ってしまいましたが、改めて振り返ってみると、初めて住む旭川で、初めて出会う人たちと一緒にいろんなことを体験し、経験できました。最初は、初めての一人暮らし、新しい生活で、毎日が新鮮で、とにかく周りの環境に慣れることだけで精一杯で、わけもわからないうちにどんどん日が経っていきました。新歓合宿の中では不安でいっぱいな私たちにいろいろと優しく教えてくれる先輩たちを見て、お互いをしっかりと認め合っていて、みんな一人一人すごく伸び伸びしているなぁと感じました。そして、自分もあんな風になりたいなぁと憧れたのを覚えています。そして、授業も始まり、気の合う友達もできてきて、今思えばそんな

に授業はきつくはなかったはずですが、そのときは入学前に想像していた大学生活よりも忙しく感じ、現実とのギャップを感じました。授業ではやはり高校と違い、将来の夢である看護師のために直接結びつくことを習い、専門的な技術も少しずつ身につけて来ました。初めてのテストでは、先輩から情報を得て、図書館などで黙々と勉強している人たちを見て、自分もやらなきゃと思い、不安ながらも友達と共に励まし合いながら頑張りました。実習用のナース服に初めて袖を通したときは、自然に気が引き締め、やる気が沸いたのを覚えています。初めての病院実習では終始緊張しながらも無事5日間終え、たくさんのことを現場で見て、実際に行き行って学ぶことができ、モチベーションもすごく高まり、すごく良い経験をさせていただきました。これからは実習もたくさん入ってきて勉強も忙しくなるだろうと思いますが、将来の自分の姿を想像しながら、あきらめないで友達と頑張っていこうと思います。

# 平成15年度

# 1年のあゆみ

- 3月27日 看護師国家試験合格発表  
(本学合格者56名、合格率100%)  
保健師国家試験合格発表  
(本学合格者68名、合格率95.8%)  
助産師国家試験合格発表  
(本学合格者2名、合格率100%)

## 4月

- 7日 前期授業開始  
11日 平成15年度入学式  
医学科新入生 95名  
看護学科新入生 60名  
看護学科第3年次編入学生 10名



- 16日 定期健康診断  
21~22日 医学科・看護学科新入生合同研修会  
(於 本学看護学科棟)



- 23日 定期健康診断  
24日 医師国家試験合格発表  
(本学合格者93名、合格率93.9%)

## 5月

- 14日 定期健康診断  
21日 定期健康診断

## 6月

- 13~15日 第29回医大祭  
医科フェスタ2003  
21日 平成15年度医学科第2年次後期編入学生  
選抜試験

## 7月

- 4~21日 第50回北海道地区大学体育大会



当番大学：北海道大学  
本学参加種目：陸上競技(男女)、準硬式野球、ソフトテニス(男女)、バスケットボール(男女)、バレーボール(男女)、サッカー、卓球(男)、バトミントン(男女)、剣道(男女)、弓道(男女)  
成績：準優勝 ソフトテニス(男)  
第4位 弓道(女)

- 16~17日 平成15年度公開講座  
「自立をうながす介護のポイント」  
受講者参加型  
24日 平成15年度医学科第2年次後期編入学生  
選抜試験  
28日 オープンキャンパス  
7月28日~ 第46回東日本医科学生総合体育大会  
(夏季部門)

## 8月15日

総合主管大学：東京医科歯科大学  
本学参加種目：陸上競技(男女)、準硬式野球、テニス(男女)、ソフトテニス(男女)、卓球(男女)、バレーボール(男女)、バトミントン(男女)、サッカー、バスケットボール(男女)、柔道、剣道、弓道、空手(男)、水泳(男女)、ハンドボール、ゴルフ(男女)、ラグビー  
成績：優勝 ゴルフ(女)  
準優勝 バレーボール(男)  
バトミントン(男)、  
バスケットボール(男)、  
弓道

- 30日 平成15年度医学科第2年次後期編入学生  
選抜試験合格者発表

## 8月

- 27日 体育大会(学生主催)  
29日 外国人留学生夏季オリエンテーション  
(大雪山国立公園 旭岳温泉)  
参加者 留学生6名、留学生家族6名  
30日 音楽の夕べ  
プラスアンサンプル、合唱部、ギター部、  
室内合奏団による附属病院ホールでの合同演奏会

9月

24日 平成15年度解剖体慰霊式



27日 平成16年度看護学科第3年次編入学者選抜試験  
30日 修士・博士学位記授与式  
博士学位記被授与者 2名  
修士学位記被授与者 1名

10月

1日 平成15年度医学科第2年次後期編入学生入学式  
8日 平成16年度看護学科第3年次編入学者選抜試験合格者発表  
16~30日 平成15年度公開講座  
「救急医療-こんなときどうしたらいいの-」  
18~19日 平成16年度AO入試  
25日 平成16年度大学院修士課程看護学専攻入学者選抜試験  
27日 防災訓練



29日 平成16年度AO入試合格者発表

11月

4日 平成16年度大学院修士課程看護学専攻入学者選抜試験合格者発表  
5日 本学記念日  
開学30周年記念フォーラム  
開学30周年記念式典  
29日 平成16年度推薦入学者選抜試験

12月

6日 室内合奏団クリスマスコンサート (附属病院)



10日 平成16年度看護学科推薦入学者選抜試験合格者発表  
20日 ギター部クリスマスコンサート (附属病院)  
21日 プラスアンサンブル、合唱部  
クリスマスコンサート (附属病院)  
25日 博士学位記授与式  
博士学位記被授与者 1名

1月

17~18日 平成16年度大学入学者選抜大学入試センター試験

2月

6~7日 外国人留学生冬季交流事業  
(富良野スキー場、大雪青年の家)  
参加者 留学生4名、留学生家族4名  
12日 平成16年度医学科推薦入学者選抜試験合格者発表  
13日 平成16年度大学院博士課程入学試験  
25日 平成16年度第2次試験 (前期日程)

3月

3日 外国人留学生との懇談会及び交流会



8日 平成16年度第2次試験 (前期日程) 合格者発表  
12日 平成16年度第2次試験 (後期日程)  
20日 平成16年度第2次試験 (後期日程) 合格者発表  
25日 平成15年度学位記授与式  
学士学位記被授与者 174名  
(医学科108名、看護学科66名)  
修士学位記被授与者 9名  
博士学位記被授与者 29名

# 禁煙にみる人間の意志と遺伝子支配の葛藤

第一内科 講師 大崎 能伸

学内が禁煙になって約2ヶ月になります。喫煙者の皆様は辛い毎日を過ごしておられることと思います。本学にはトイレでこっそり一服したり、誰も居ないカンファレンスルームで窓を開放して吸うような人はいないと思います。非喫煙者は煙草の非常に非常に敏感で、ルール違反はすぐにわかってしまうものです。煙草が癌の原因であることや、他の人の健康被害の原因になることはよく理解されているはずですが、習慣性喫煙から抜け出せない、あるいは抜け出そうとしない人がいるのも事実です。ここでは「自分だけがやめられない」とうつ状態になる前に、なぜ煙草から離脱できないかについて考えてみたいと思います。

たいていの場合は、友人や先輩や大人のまねをして、ちょっとした理由でなんとなく喫煙が開始されます。初めは1回か2回おそろおそろ肺に煙を入れてみて、だんだん一本吸えるようになり、そのなかで喫煙の生物学的や心理的な影響が持続する人が習慣性喫煙者になるといわれています。喫煙を習慣にすることでニコチン依存症となり。習慣性喫煙者の30%が毎年煙草をやめようとはしますが、その10%以下しか禁煙できないという報告もあります。

双生児を対象とした喫煙習慣の研究では、喫煙の開始、ニコチン依存症の発症、喫煙習慣の継続に関して遺伝的な要素が存在することが示されています。なかでもニコチン依存の遺伝的な傾向が強いと指摘されています。もちろん、喫煙習慣のすべてが遺伝的に支配されているわけではなく、その人の個性や取り巻く社会環境も影響します。しかし、これらの要素を除いても、遺伝的素因が有意に存在するとされるのです。

喫煙習慣の遺伝的傾向が示された結果、関連する遺伝子の同定が試みられました。初めに、ドパミン情報伝達系に関連した遺伝子が対象にされました。その理由は、薬物中毒患者でドパミン情報伝達系に変化がみられること、ニコチン-アセチルコリン受容体がドパミン系神経細胞に多く発現していることなどです。ドパミン情報伝達系の検討では、喫煙者のドパミン2受容体遺伝子(DRD2)にA1アリルを持つものが多く、DRD4やDRD5も喫煙習慣と関連すると報告されています。また、ドパミントランスポーター遺伝子のSLC6A3に9リピートを持つものが喫煙者になりやすいと報告されています。ドパ

ミン情報伝達系以外では、モノアミンオキシダーゼ遺伝子などの検討がありますが、明らかな傾向はみられていません。セロトニン調節系の遺伝子は、抑うつや不安などの精神症状に関連すると考えられています。禁煙すると不安が強いために喫煙する人は、セロトニン調節系の遺伝子の5HTTLPRの多型性と相関したと報告されています。

ニコチンでは、12種類の異なる $\alpha$ 、 $\beta$ サブユニットから構成されるニコチン-アセチルコリン受容体を介した特異的な情報伝達系の存在が知られています。実験動物の出生前に煙草の煙を負荷すると、ニコチン-アセチルコリン受容体の発現が増加すると報告されています。また、喫煙者では非喫煙者よりもニコチン-アセチルコリン受容体の発現が高いとされています。この受容体は中枢神経系に広く分布することから、ニコチン中毒とサブユニット構成の関連が注目されています。また、ニコチン依存症ではニコチン代謝が異なっているという仮説から、ニコチン代謝に関連する遺伝子のCYP2A6、CYP2D6が研究されていますが、ここでは一定の傾向はみられていません。

以上のように、双生児の研究結果から喫煙の遺伝的素因が強く示唆されていますが、その責任遺伝子という点からみると明確な解答は得られていません。ニコチンの薬理作用はノルエピネフリン、セロトニンやGABAなどを介した複雑なもので、ニコチン依存の程度はこれらの情報伝達系遺伝子の遺伝子多型性によるものと考えられています。運悪く、ドパミン受容体遺伝子のDRD2にA1アリルを持ち、ドパミントランスポーター遺伝子のSLC6A3に9リピートがあり、セロトニン調節系の遺伝子の5HTTLPRに多型性があり、中枢神経系でのニコチン-アセチルコリン受容体の発現が増強し、ニコチン代謝遺伝子の機能が変化している人がなんとなく喫煙を開始すると、未来永劫その子孫に至るまで絶対に煙草から開放されないのかもしれませんが。人間の意志が遺伝子によって定められた運命を変えることができるのか、また、これに禁煙外来がどのように関わるのか興味がありますが、残念ながら紙面が尽きてしまいました。字数の関係で文献が引用できませんでしたが、興味のある方はAm J Med Genet 118B:48-54、2003、J Epidemiol 13:183-192、2003をご参考ください。



## ボランティア体験

看護学科第2学年 田丸杏奈



2年生の夏休み、私は「旭川肢体不自由児者父母の会」が主催する一泊二日の『療育キャンプ』に、学生ボランティアとして参加しました。部活動が縁で、旭川市障害者福祉センターから、熱心にボランティア募集のお知らせを頂き、

「自分にもできることがあったら出掛けてみようかな」と思いました。ボランティアに関心を持っていたこと、自分の経験を積めること、などの期待感から、友人や後輩達と参加したのです。

参加者は、脳性麻痺などの障害をもっている方々とその親御さん、医師や看護師、学生ボランティアを含め、全部で数十人です。治療とレクリエーションを兼ねて登別に行きました。

最初はとても緊張し、何をしたらいいのか戸惑いました。そんな中、参加者のお母さんから「私が死

んだら、この子はどうになってしまうのだろう」という声が聞こえました。障害がある子供をもつ親の苦労や不安が、ひしひしと伝わってきました。私にはどうすることもできませんが、少しでも役に立ちたいという思いから、自然と何をしたらいいのかを見つけました。同行していた看護師さんと入浴介助を行った時は、具体的に介助方法を教えていただきました。看護師を目指す私にとって、とても勉強になりました。

この一泊二日の『療育キャンプ』は残念ながら天候には恵まれませんでした。多くの人々と出会い、ふれあい、共に楽しい時間を過ごすことができました。福祉の現場の声を実際に聞いたり、体感したことは、私の今後の学習意欲を増す、よい経験になりました。ボランティア活動は、決して相手に何かしてあげるだけでなく、自分自身にとっても、プラスになるものだと感じています。これからも、いろいろなボランティアに参加し、自分を磨いていきたいです。

## 禁煙に関する講演会

1月20日臨床第一講義室において、第一内科の大崎講師により禁煙に関する講演会が行われました。

煙草の害についての話から、禁煙の難しさとして、生活習慣になっている面と、ニコチンによる薬剤面から興味深い話を聞かせてくれました。

やめることが難しいので、途中で喫煙してしまっても恥ずかしいことではなく、そこから再び禁煙を続けることが大事だと勧められました。

このとき、イギリスの逸話を思い出しました。

A氏 禁煙は難しいものですねあ。

B氏 あんな簡単なものはない。私は今までに何度禁煙したかわからない。

(学生課)



講演する大崎講師

## 平成16年度日本学生支援機構奨学生の募集について

日本学生支援機構（旧日本育英会）は、優秀な学生で経済的な理由で就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本学生支援機構からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本学生支援機構へ推薦します。ただし、日本学生支援機構では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

申し込み方法はインターネット（スカラネット）による申込みです。学生募集要項及び申し込み方法の説明会を4月12日（月）・13日（火）午後5時30分から第7講義室において実施します。希望者は集合してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、専門職員（厚生担当）に相談してください。

## 各種保険について

本学が薦めている保険の概要は、下図のとおりです。

③ 学生・生徒総合保険A・Bタイプ ※3階部分	
内 容	傷害・損害賠償を24時間補償&針刺し事故を補償
補 償 金 額	死亡補償金 Aタイプ 500万円 Bタイプ 300万円 対人賠償 Aタイプ 5,000万円 Bタイプ 3,000万円 対物賠償 Aタイプ 5,000万円 Bタイプ 3,000万円 針刺事故の予防・治療費補償 1事故 500万円
掛 金	学生生活のしおりを参照してください。
加 入 の 是 非	看護学科/医学科第1～4学年 任意 医学科5・6学年 全員加入（臨床実習のため） ※学生教育研究災害傷害保険及び医学生教育研究賠償責任保険（医学賠）に加入していること。
② 医学生教育研究賠償責任保険（医学賠） ※2階部分	
内 容	正課中、学校行事中、通学中に、他人にケガをさせたり、他人の財物を壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償
補 償 金 額	対人賠償 1名1事故1億円 対物賠償 1事故250万円
掛 金	6年間 4,800円 4年間 3,200円
加 入 の 是 非	平成15年度以降入学者 全員 医学科5・6学年 全員（臨床実習のため） 医学科・看護学科第3～4学年 任意 ※学生教育研究災害傷害保険に加入していること
① 学生教育研究災害傷害保険（学研災） ※1階部分	
内 容	正課中、課外活動中、通学中及び学校行事中に本人が傷害等の事故にあった場合
補 償 金 額	死亡補償金 正課中 2,000万円 課外活動中 1,000万円 傷害補償金 正課中 治療日数4日以上から 課外活動中 治療日数14日以上から 入院 1日 4,000円
加 入 の 是 非	入学時全員加入 ※現在第3～4学年は正課中死亡時1,200万円

詳細については、学生課専門職員にお尋ね願います。

本学では、学生諸君の学生生活及び日常生活に対して左図のような保険を用意して、加入を薦めております。

①学生教育研究災害保険（学研災）は、学生生活中に負った本人の傷害等の保険です。全員加入としております。

②医学生教育研究賠償責任保険（医学賠）は、学生生活中に他人から損害賠償を求められた場合の賠償補償保険です。新入生は全員加入としております。

③学生・生徒総合保険A・Bタイプは、日常生活24時間をカバーする傷害保険と賠償補償保険です。加入は任意ですが、医学科5・6学年は臨床実習に備え全員加入としております。

## 平成16年度前期分授業料免除及び延納・分納について

平成16年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生課専門職員（厚生担当）から必要書類を受け取り、申請期間内に提出してください。

免除基準の概要はつぎのとおりです。

- 経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ学力優秀と認められる場合
- 授業料納期前6か月以内において学資負担者が死亡、又は風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合

なお、このことについては、公用掲示板にも掲示してありますので確認してください。

また、不明な点は、学生課専門職員（厚生担当）にお問い合わせ願います。

申請期間 在学生 平成16年3月31日(水)  
                  (期限厳守)  新入生 平成16年4月21日(水)

※注意 今年度より授業料滞納者の授業料免除申請は、受理しないことになっておりますので注意してください。

## 授業料未納による除籍について

本学学則に“授業料の納付を怠り、督促してもなお納付しない者は除籍する”と規定してありますが、この規定の運用についてより明確にするために、授業料を2期滞納し所定の期日までに納入されない場合には、除籍することとなりました。

この取扱いは、平成17年4月1日において2期以

上滞納している場合、平成17年9月30日をもって除籍となります。

以後6か月（授業料納期）ごとに適用されますので、授業料の支払計画はきちんと立ててください。

なお、授業料納入が困難な事態が予想される場合は、早めに学生課窓口でご相談ください。

## 表彰制度について

今年度から学生諸君の修学意欲を向上させるとともに、課外活動等社会活動にも活発に参加して充実した学生生活をおくる契機となることを期待して、学業成績の優秀な学生や課外活動等において顕著な成果を挙げた学生及び学生団体を表彰する制度ができました。

○学業成績優秀者の具体的な例として

- 1) 医学科6年間通算して学業成績が第1位及び第2位の者
- 2) 看護学科4年間通算して学業成績が第1位及び第2位の者
- 3) 編入学生については、卒業時における各学科の編入学生の中で第1位の者

○課外活動で特に顕著な成果を挙げた者の例として

- 1) オリンピック、ユニバシアード大会等国际規模の競技会、展覧会に出場又は出展した場合

- 2) 国民体育大会、全日本大学選手権等の全日本規模の競技会、展覧会に出場又は出展して3位以内に入賞等した場合

- 3) 東医体、地区体等の地区大会規模の競技会、展覧会に出場又は出展して優勝した場合

○社会活動等で特に顕著な成果を挙げた者の例として

- 1) 公共団体等から表彰を受け、社会的に特に高い評価を得たもの
- 2) 新聞、雑誌等に掲載され、社会的に特に高い評価を得たもの
- 3) 人命救助、災害救助等に貢献したもの

等ですが、これらの実施は学年担当教官又は学生団体顧問教官からの推薦に基づき、教務・厚生委員会が審査し、表彰に該当するとなれば学長から表彰状が授与されます。

## 科目等履修生について

本学では、平成16年度より科目等履修生の受入れをいたします。

この制度は、本学学生以外の方を対象とし、本学で開講される授業科目を履修した上、試験の結果等により単位を認定、授与するものです。

医学部医学科においては基礎教育科目、看護学科においては一般基礎科目で、それぞれ授業担当教官が履修を認めた科目、大学院医学系研究科修士課程、

博士課程においては授業担当教官が履修を認めた科目とします。

詳細については、本学学生課0166-68-2206（学部）、0166-68-2207（大学院）にお問い合わせください。

なお、本学のホームページ・学生課→お知らせ→科目等履修生にてもご案内しております。

（学生課）

## 外国人留学生冬季交流事業

平成15年度外国人留学生冬季交流事業が、2月6日（金）・7日（土）にかけて行われ、在籍留学生10人中4人と、その家族4人、職員3人の計11人が参加しました。

この事業は、北海道の冬のスポーツ、スキーを通して雪や寒さの中での楽しみを知ってもらうと共に、留学生同士の交流や「青年の家」を利用する研修生の人達とのふれあいを目的に、今年で4回目の実施でした。

今年も富良野スキー場まで足を伸ばし、曇り空ではありましたが吹雪に遭うこともなく無事にスキーやスノーボードを楽しめました。

夕方からは大雪青年の家に移動し、交流会を行いました。

他の研修団体がなかったため、見学に来られた方達と同じように、じっくりと施設を見る事ができました。

翌日は大雪青年の家で、水泳、卓球、バドミントン等、思い思いのスポーツを楽しんでいました。

（学生課）



## 本学敷地内は全面禁煙となりました

3月1日から建物内・屋外を問わず、本学の敷地内では全面禁煙となりました。室内、廊下、休憩コーナー、附属病院を含めた建物内全てとグラウンド、駐車場、芝生を含めた屋外の敷地、本学のどの場所であっても喫煙はできません。

嗜好品であるなら、吸う、吸わないは本人の自由とも思われますが、吸いたくない人の所へも煙は流れます。

旭川市の小学校、中学校は1月1日から敷地内の

全面禁煙が決められました。

人の病気を治す、健康を管理する医師、看護師を養成する医科大学としても同様に模範を示して禁煙としました。

20年以上も前「かぐらおか」第10号に「医学生はタバコをやめよ」と寄稿された名誉教授の提言がこのような形で実現することとなりました。

（学生課）

## 学位記授与式

平成15年度博士学位記授与式が、12月25日（木）午前10時から第2会議室において行われ、大谷克城

氏が博士（医学）の学位を授与されました。

（学生課）

## 病院ロビーにてのクリスマスコンサート 4題

### 1. 室内合奏団 -全員がサンタクロース、ボーカル付き-



やや早めですが、12月6日(土)午後3時からトップを切って室内合奏団によるクリスマスコンサートが行われました。今年には12月というのに雪が遅れていましたが、数日前から雪が降りホワイトクリスマスのムードになりました。

ステージを見ると赤い衣装に赤い帽子、サンタクロースの合奏団でした。

女性サンタクロースのボーカルと共にクリスマスにちなんだ曲が披露されました。何となく硬いイメージの弦楽器ですが、今回は親しみやすく目と耳の両方から楽しませてくれたコンサートでした。

### 2. ギター部 -カジュアルに一生懸命に-

12月20日(土)午後3時からギター部のコンサートが行われました。

音楽には必ずと言ってよいほど登場する楽器、ギターの演奏をじっくりと聴いて欲しいという姿勢が伝わって来ました。全員による合奏に始まり、前半はしっとりと聴かせるギターの合奏と独奏、後半はポピュラーな歌を交え親しみやすい演奏で、フィナーレは賛美歌109番Silent Night(清しこの夜)でクリスマスの雰囲気味わせてくれました。



### 3. プラスアンサンブル -息吹と迫力の3部構成-



12月21日(日)は午後3時からプラスアンサンブルのコンサートが行われました。挨拶代わりにディズニー・メドレーで始まり、雰囲気に呑まれたところで挨拶に切り替えるという巧みな演出でした。ラテン系を交えた演奏の後、スカバンドという少人数による演奏では、ライブ風な雰囲気で気分を昂揚させられました。その後Tシャツにジーンズといういつもの服装から、サンタクロースに変身しクリスマスにちなんだ曲目、観客に高齢者の方もおられたので美空ひばりメドレーが演奏され、管楽器にもよく調和していました。

クリスマスの曲でフィナーレとなりましたが、次々にジャンルを変え時間を忘れる演出に「ブラボー」の声がかかりました。

### 4. 合唱部 -皆さん楽しみましょう-

同じ日の午後7時から、合唱部のコンサートが行われました。

人の声による音楽は、独特の柔らかさを感じさせます。一人ひとりの音声が楽器になり、ハーモニーを聴かせるというのは最も贅沢な音楽かも知れません。

混声合唱で始まり、女性コーラスのときには男性の指揮、男性コーラスでは女性の指揮と協力し合っている姿には、好感が持てました。

後半はサンタクロースとトナカイが登場し、にこやかにダンスも披露してくれました。リズムに合わせたダンスから袋を開き、プレゼントを配り始めるのは絶妙でした。コンサートの終了後には全員が通路に並び、帰られる観客一人ひとりにお礼を述べていました。



各部とも趣向を凝らし、演奏と共にクリスマスの定番のサンタクロースの扮装やプレゼントにより、患者さんの気分を盛り上げていました。気分転換が大きな効果となって回復に役立って欲しいという、心くばりでした。

医師のエゴを描いたテレビドラマ「白い巨塔」のエンディングテーマ、アメージンググレースを室内合奏団によるボーカルと合唱部による混声合唱で聴きました。演奏の違いにより別々に2曲聴くことが出来た気分でしたが、マスコミに取り上げられることの多かった医学部において、自分たちは患者さんを思いやる医師、看護師を目指しているという姿勢を言葉以上に演奏によって示してくれたと思います。(学生課)

## 教官の異動

採用	H16.1.1	経営企画部	助教授	柴山 純一	昇任	H16.3.1	麻酔・蘇生学講座	助教授	高畑 治
昇任	H16.2.1	精神医学講座	助教授	布村 明彦	配置換	H16.3.1	保健管理センター	講師	川村祐一郎
昇任	H16.3.1	生化学第二講座	助教授	大保 貴嗣	転出	H16.3.1	市立旭川病院へ	講師	武井 明

## 駐車違反について

本学の駐車場は、かなりの広さがありますが、車の普及により手狭な状態になっており許可のない車が来ても、駐車するスペースは全くありません。

不法駐車により除雪作業においては著しく邪魔になり、大型車が通れずに困っていることもあります。違反者については、その都度注意をしているところ

ですが、何度か注意を受けながら違反を繰り返していた者が数名おり、悪質な違反者として副学長から厳重注意処分を受けました。

バス等の交通機関を利用し駐車違反をなくすよう、各自の良識を望みます。

(学生課)



「かぐらおか」は本学の学内広報誌として開学以来115号発刊されている。学長をはじめ学内の様々な方々から寄稿があり、また学内の重要な出来事が記事になるから読む側にとっては毎号大いに楽しみである。

「かぐらおか」については広報誌編集委員会が編集の企画立案を担当することになっており、従来附属図書館長がこの委員会を担当していた関係で自分に関わることになった。しかし、この委員会は今年度いっぱい廃止になることになり、そのあとは事務局で編集・発行を担当することになる予定である。

現在、国立大学法人化に伴って学内に多数ある各種委員会の見直しが行われている。これは、大学運営のために教員が多大な時間と労力をさかれている現状を改め、「教員が本来の使命である研究、教育及び診療に専念できる体制」をつくるために、現行

の各種委員会等を統廃合するなどして極力少なくする方向で検討すること、及び事務職員等が教員と連携協力して大学運営の企画立案に積極的に参画できる体制を整備することを目的とした改革である。

「かぐらおか」の編集についていうと学生課の担当の方が企画立案をして下さっていて編集委員会はそれを追認して各寄稿者に記事依頼をするだけになっているから、広報誌編集委員会は必要ないというのは妥当な判断である。

大学の運営には数多くの課題が山積するから、それらすべてを合議の上で処理しようとするは大変な時間と労力がかかるし、個人個人の責任が薄まる。しかし、一方、課題を個人まかせにすると、時には間違いやトラブルの種になりかねない。「民主主義」と「合理性・効率性」はときには相反する頭の痛い命題である。国立大学法人化のメインテーマである「競争的環境の中で個性輝く大学」を目指すためには学内のあらゆる方々の力の結集が必要であるが、それには個人個人のやる気と知恵と善意に依存するところがますます大きくなる。

